

地震等被災地の人間模様

研修副委員長 大工 金井義雄

東日本大震災から11年、特集番組も多く、今年3月16日にはマグニチュード7.3の地震が発生。こんな時なので、過去の地震被災地での出来事を顧みたいと思います。新潟県中越地震。新幹線脱線場所まで行って、時間調整して川口町役場に戻ってきたのが、午前8時、最初に目にしたのが、住民に罵倒され続けている50代と思われる職員、地震後10日以上たち、疲れきった虚ろな目をして立ち尽くしていました。被災自治体の公務員は罵倒されるためにいるのだと感じました。建築系ボランティアを志願して、3回たらい回しされたところで、今日から罹災証明の調査が始まるから手伝ってもらっていいですよとのこと。待機中に役場で震度5強を体験、ロッカーを手で支えながら、見渡していたら、恐怖心が異なるのを感じます。一度大きい揺れを体験すると、体験したことのない自分と比べて、遥かに大きい恐怖を感じるみたいです。



川口町の腕章を1日中貸与されました。この腕章をみて、「泥棒か？」なんて言う住民はいません。その代わり新たなリスクが生じます。住民がツツツツと寄ってきたら、要注意。役場の職員とみて苦情を言おうと思っているのです。全部聞いてから、「川口市のほうから来た、民間の建築ボランティアです」と言ったら激怒になるので、相手が言い出す前

に自分の素性を言わなければいけません。被災地では、役所の与信機能は絶大ですが、役所に対する不満も大きいのです。普段は臨機不変でやってきた公務員が被災時は臨機応変で、できないことで罵倒されるのです。

さて、M建築さんのお得意様であることが、罹災証明の時わかった家が直っていたので、M建築さんが来てくれたのですねと言ったら、「こないで、ほかのところで直しました」とのこと。そう、M建築はお得意様を失ったのです。つまり、私のような「自分でやらなければ」という、大工タイプの工務店は負け組なのです。二県先からでも人を見つけて、技術を問わないような建設会社が勝ち組なのです。しかし、この業者もトンビに油揚げさらわれています。解体までは持ち込めましたが、結局、新築住宅を建てたのは、全国展開している住宅メーカーだった、という顛末。大学のワンゲルの後輩が、全国展開している住宅メーカーに勤めていますが、「しっかり儲けさせていただきました」と言っています。最強の勝ち組はこのあたりみたいです。

川口町田麦山地区では、多数の金物無しの新耐震木造住宅が倒壊 or 大破しています。（川口市内の物件でも、耐震診断で新耐震の80%は金物無しか、まともな金物使いが出来てなく、旧耐震と同じ接合部IVで評価しています。）直感的に金物必要と思いました。能天気（失礼）、金物なくても新耐震なら大丈夫と思っている人がいますが、川口市で地震被害が起き、慌てふためく姿を想像してしまいます。田麦山の全壊通りで、ただ1軒住んでいる家があったので、「廻りがこんなに壊れているのに、なぜあなたの家は大丈夫なのですか？」と聞いたら、「私の家は小千谷市の業者です。廻りの家は地元の大工です」でした。



田麦山地区、小千谷市の業者が建てた住宅。外観上、被害は玄関ポーチの天井が落ちていてだけで居住可能。他の家は住めない状態で、田麦山小学校に避難している。



田麦山地区、新耐震木造住宅倒壊事例 Z金物なし



田麦山地区、新耐震木造住宅大破事例 Z金物なし



田麦山会館 役所が監理したはずの建物。大破、Z金物「誤使用」釘は細く、短いN38。

1年後に見に行ったら、地元の大工（何人いるか分からないが、少なくとも1人は）が、この地域から消えていました。全国から、学者や見識がある業者の田麦山詣でが続いていました。私は、1981年後半から2000年前半の新耐震では、金物は法律による義務付けではなく、住宅金融公庫を使ったお勧めなので、大工のために、言わないように心がけていました。ですが、数いる田麦山詣での人の中には、被災した住民に正義感から金物の件を言った人がいたと思います。被災住民の心情からすれば、「大工の勉強不足で、倒壊や大破になった」となり、針のムシロに座っている心境だったのではないかと。法律違反でなく、お勧めを無視したことにより、故郷を捨てるという社会的制裁を受けた初めての木工では。被災地の建築業者は、3～4年は売り手市場、草刈り場になって食い荒らされ、その後15年～20年、地元の仕事がなく、出稼ぎを余儀なくされます。1年以内にいなくなる原因はこれしか考えられません。

川口町、前半の罹災証明の調査の担い手は、町内建築業者（建築士）私はこの仕事にボランティアで参加させていただきました。町役場の担当は福祉系の職員、建築系は土木事務所がやるので、町役場にはいないのです。「寒いですね。寒いですね。」と言うが、私はもっと暖かいほうから来ているが寒くないよと思いながら、大学の設計製図の課題を徹夜で仕上げ朝出かける時の寒さを思い出し、「どれぐらい寝ています」と質問したら答えは「3時間睡眠」でした。先の調査に苦情あり物件の町内初めての3次判定をしたのは、私です。「もっと、被災度を上げろよ」という住民の前で、お手盛りした状態の大規模半壊で、同じ評価にしました。担当からは、「同じ評価で良かったです。ゴネたら上がるという情報は半日で町中に広まります。そうなったら收拾がつかなくなるころでした。」後半は、ニーズを川口市役所の市長秘書室に伝えたので、建築系の職員が4人ずつきていたそうです。建築審査課のMさんに、新耐震の家が倒壊や大破壊しているから、川口町に行っているついでに田麦山を見に行くと頼みましたが、毎日、群馬の水上（林間学校の施設？）から峠越えて川口町までいっているの、見に行く暇はありませんとの話でした。たぶん、被災地に負荷をかけないという教科書的発想なのでしょう。小便をポリタンクで毎日水上に持ち帰ったのでしょうか。大便を水上ですていけば、その分は被災地の負荷は

減りそうです。ただ、現地の状態は通常の被災地像とは全然異なっていました。最初はトンネル崩落や国道17号の崩落で陸の孤島になっていましたが、震度7が出ると日本中から注目の的になり、支援物資が使い切れないぐらい集まりました。被災者が、「食べるのもボランティアだよ」という不埒な発言をするほどの量です。カセットコンロが1世帯あたり5台、被災者の物資を横取りするような心配もなかったはず。自衛隊のお風呂も設置されています。風呂の床に座ろうとすると完全水没するような深い風呂なので、東日本大震災で60才ぐらいの女性が自衛隊の風呂で溺死した記事を見たときに、納得している自分がありました。自衛隊の被災者用テントも空きが多く、私も皆にテントに泊まるように勧められました。(車に、高額なレーザーレベルも積んでいるので断りましたが)、軽自動車のバンは3×6の合板が積めるので、エコノミー症候群が発生する心配もありません。もう晩秋なので、寒さ的には鉄の棺桶ですが。車には、軽水洗便所や20Lポリタンク、食料も積んでいて、被災地に頼らずに行動できる資材は積んでいます。



現地の食料過剰を知ってからは、避難所や役所で遠慮しないで食べるようになりました。川口市役所の職員も2日間自衛隊のテントで泊まり、1日は水上に帰って洗濯をするというサイクルで動けば、自由な時間が作れ、被災地の実情を観察できたのに。田麦山に行く時間もできたはず。普通の公務員で一番重要な条件は新たに仕事を作り出さないことみたい。作り出すと、ほとんどは支出事業だから予算を確保しなければいけなくなる。他の課の仕事を奪わない。だから防災系でないから被災地を見る必要はない。被災地で平時の価値観を行使できた川口市の職員にとっては、幸福な現場だったのでは。ただ被災自治

体の公務員がこのような価値観で行動すると、被災住民から、「何課の職員の前に、何町の職員でないのか！」と罵倒されるのですよね。公務員にとって、自治体が被災自治体になることは、地獄の始まり、この地域の誰よりも、辛い立場に追い込まれることに。平時に積み上げて来た考えかたやスキルが全否定される場面です。

さてさて、大破と中破の間の建物をみて、「直せます」。30分後、中破と小破の間の建物をみて「解体ですね」。このアドバイス何？ 小さい町では、建設業者は、全住民の懐具合を知っていて、究極の建築相談をしています。最初の家の方は年金暮らし、新築はできないだろう、それなら直すしかない。後の家は5、6軒新築住宅を建てる金があるのだろう。「ケチの付いた建物など、解体して新築にしましょう」みたいです。

普段は、勉強不足では聞けないタイプですが、被災地では、聞きまくりです。一期一会、今しか聞けないのです。修理している大工に「この家どうだったのですか？」「地震で傾いた」、「現在、まっすぐなっているみたいですが、どうやって傾きを直したのですか？」「ロープで引張って」 地震で変形したということは、外装内装が付いている建物が、上棟直後のような柔らかさなのです。被災地から帰ってきて、すぐウインチを3台購入しました。ある工務店の土間にヒビが入った作業所で、どのような被害ですかと話しかけたら、ヨモヤマ話のなかで、「修理した住宅の請求書を忙しくて出していなかったが、気づいたら更地になっていた。修理代請求できないよね。」との問。「残念ですが、請求書出せないでしょうね」と答えました。お客様第一の真面目な工務店ほど、こんな目に合いそうです。被災地の工務店になったとき、このことを知っていても、リスク回避できる自信はありません。

全国展開している住宅メーカーが営業マンを個別訪問させて仕事を受注しているのです。真剣な気持ちで質問すれば、ほとんどの場合、取材拒否はありません。それなりの数の被災地に行っていますが、地震の被災地では、小千谷市の商店街の修理現場で、守秘義務を理由に断られたのが1件あるだけです。被災地は早く行けば行くほど、話が聞きやすいです。だんだん、悪い感情が出てくるので、聞きにくくなります。命の危機を感じた災害のほうが、被災者はすごく話してくれます。金銭だけで計算できる被災地は話を聞きにくいです。茨城J市で水位が上昇して水害になった場所（堤防決壊ほど命の危険は感じない）では、「道路を写しているうちはいいが、家を写すときは気を付けろ」と脅されました。東日本大震災のU市の液状化の現場も、命の危機は感じず、経済的損失が出ているだけなので、悪い感情が満ちていました。高校の同期が市の幹部職員（たぶん企画部長）をしていましたが、「市民の目が怖くて、3ヶ月、夜に家に帰って寝ることができなかった。」と言っていました。『市民が液状化で苦しんでいるのに市職員はのうのうと自宅のベッドで寝ているのか』という悪感情を危惧したのだと思います。

被災された方々には心からお見舞い申し上げます。

多くの被災地におもむき、地元の行政の方々と、協働させていただきました経験に基づき、忌憚りの無い、しかし、実は愛情に満ちた経験談です。（編集人）